もっと早く素直になっていれば、彼女を失わずに済んだのだろうか……。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

「なあ靖徳(ヤすのり)聞いたか？　清水と小椋の話。
あいつら付き合ってんだってよ」
「マジで？　まあ前からアヤしかったもんなぁ」
休み時間。
ダチの中村と駄弁りながら蒸し暑い廊下を歩く。
清水は学年一の長身で、俺らと同じバスケ部に所属している
イケメン。
小椋は女バスのキャプテンで、学年内でもなかなかの美人だ。
バスケ部のキャプテン同士、お似合いと言えばお似合いの
組み合わせだった。

近頃こんな話をよく聞くようになった。
やれ何組の誰々と誰々が付き合っているとかなんとか。
入学したての頃は女子と付き合うなんて気恥ずかしくて
考えられなかったし、そんなこと漫画の世界かヤンキー連中の
間だけの話だと思ってた。
男は男同士、女は女同士つるむのが当たり前。
俺だけじゃなく誰もがそう思っていただろう。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-batter

だけど、２年の秋が終わる頃には、急に付き合い出す奴らが増えていた。

３年にもなると男子女子の気まずさが薄れ、ごく普通に惚れた腫れたの空気になっていた。

俺が知っているだけでもカップルは６組。

主に運動部のやつらだが、全６クラス、１組ずつカップルがいる計算になる。

俺らが所属しているバスケ部は、男子も女子もクラスの中心、いわゆるリア充グループに入ってる場合が多い。

そんなバスケ部の中でも特に人望がある清水と小椋。

二人が付き合っていたとしても何も不思議じゃなかった。

「いいよなぁ。もうヤったのかな、あいつら」

窓の外を眺めながらため息をつく中村。

こんな下世話な話題も今はそう珍しいものじゃない。

お調子者グループの中には、聞きたくもないシコり報告を毎日してくるバカもいる。

「なに中村。おまえ好きなやついんの？」

「いないけど……でも彼女ほしいよな～。もう３年だし、部活も引退したことだしさ。卒業までなんか思い出作りがしたいわけよ」

「思い出作りねぇ……」

「そういう靖徳は？　好きなやつとかいる？」

「……えっ？　いや俺は」

思いがけない中村の切り返しに、一瞬どもってしまった――

そんな時だった。

きみを失った夏 体験版
(c)Aqua-baiser

「あ……あの、やっちゃ……佐瀬くん。ちょっといいかな」

ふいに女子に話しかけられた。

――青柳千穂。クラスメートだ。

地味で大人しくて、クラスの中でも目立たない女子。

だけど……。

「……ああ。なに？」

平静を装ってぶっきらぼうに返す。

でも、内心飛び上がりそうなほど動揺していた。

千穂に声をかけられるなんて滅多にないことだから。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

中村を先に行かせると、俺はなるべく目を合わせないように千穂と向き合った。
……千穂は、俺が素直に応じたことにホッとしているようだ。
「あ、あのね。今朝、やっ……佐瀬くんのお母さんに声を掛けられて」
「俺の親に？」
「うん……」
なんだろう。

「それで、もう佐瀬くんが家を出た後だったから、伝えてほしいって頼まれて」
「……そうか。今日は携帯家に忘れてきたんだった」
「あ、だから佐瀬くんのお母さん、わたしに頼んだんだね」
納得といった表情で千穂が微笑む。
その仕草にドキッとさせられる。
「で、伝えてほしいことって？」
「あ……うん。あのね、えっと……」
言いづらそうにモジモジしている千穂。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

「今日の夕方、佐瀬くんの家で集まりがあるんだって。
うちのお母さんも行くみたいで……
あ、詳しくは聞かなかったんだけど」
「……集まり？」

「う、うん。それでね……今日は部活もない日だから、
佐瀬くんと一緒に帰ってきてって頼まれたの。そのまま
わたしも佐瀬くんのお家の集まりに来るように……って」
「はぁあ!?」
思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。
俺の家で集まり？　しかも千穂と一緒に帰ってこいだって？
なに考えてんだあの母親は！

きみと失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

『……ど、どうしよう？　やっぱり嫌だよね。
わたしなんかと一緒に帰るの』

困りきった表情でおどおどする千穂。
俺が大声を上げた理由を勘違いしてるのかもしれない。

『いや……それより、ち……青柳は、いいのか？』
『うん。佐瀬くんのお母さんに頼まれたことだし、
わたしは、えっと、その……いやじゃないから』
『……!!』

体温が一気に上昇したような気がする。
千穂自身は、俺と一緒に帰ることを嫌がっていないのか……。

すみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

『……わかった。いいよ、一緒に帰ろう』
『!! ……いいの？』
『ああ』
『よかったあ……』
久しぶりに見る千穂の笑顔に、また俺の心音が跳ね上がる。
『あ……つぎ移動教室だから……じゃあ、また』
『ん』
千穂は安心したように息をつくと、心なしか嬉しそうな足取りで俺の横を通り過ぎていった。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

ふと後ろ姿を見送る。
ピンクのキャミソールが半袖ブラウスに透けてドキッとする。
千穂の背は俺より低いままだ。
けど、なんとなく体つきが女らしく丸くなったような……
って、何を考えてんだ俺は！

（今日は千穂と一緒に……下校するのか）
なんだかそれじゃ付き合ってるみたいじゃないか。
もし誰かに見られて、噂されたらどうしよう。
そんなことをモヤモヤと考えながら、俺は教科書を取りに
いったん教室に戻るのだった――

き夢を失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

――青柳千穂。
クラスでも目立たない、地味で大人しい女の子。
千穂は俺の幼なじみだ。
幼稚園からの顔見知りで、家が近いこともあり、
家族ぐるみで仲良くしていた。

千穂は小さい頃からおとなしくて、いつも俺の背中に
隠れるようにいた。
決して暗い性格じゃないが、とても控えめで遠慮がちな……
よく言えば慎ましく奥ゆかしい女の子だ。
昔はよく一緒に遊んでいたけど、俺がミニバスに入った頃を
境に、だんだん付き合いが減っていった。

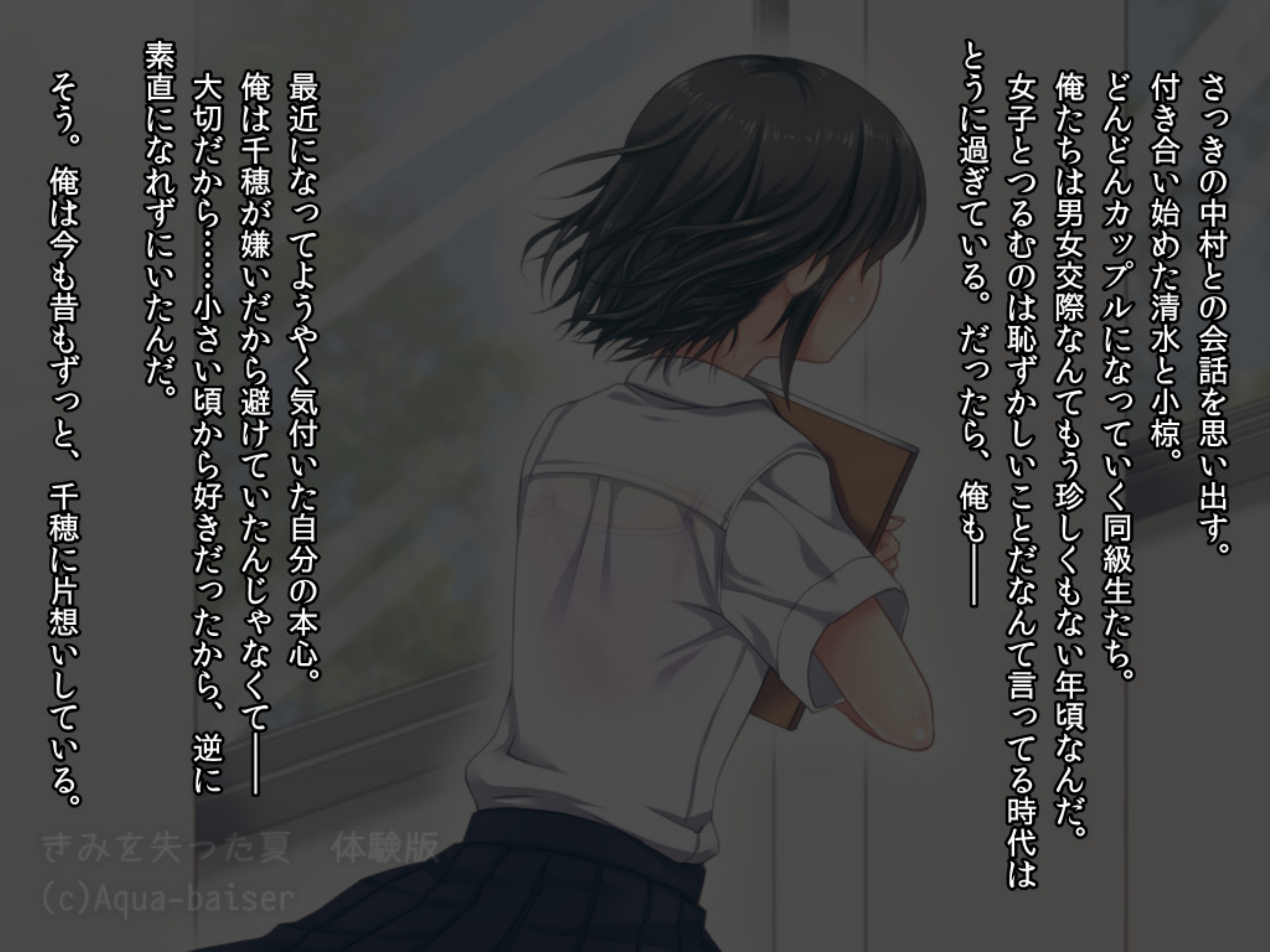
きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-Kaiser

……いや。俺がわざと千穂を避けるようになったんだ。
小さい頃はあまり考えなかった「男と女」をヘンに
意識してしまって。
女とつるむなんてみっともない、恥ずかしいことだと
思い込むようになった。

今思えば、千穂にはひどい態度ばかりとっていたような
気がする。
それでも千穂は前と同じように俺と仲良くしようと
してくれたけど……。
察しの良い彼女はきっと俺の気持ちを汲んだんだろう、
そのうち自分から話しかけてこなくなった。

親同士は今も相変わらず仲が良い。
そして多分、俺と千穂の仲も昔のままだと思っている。
だけど、俺と千穂は気まずい関係のまま時が過ぎて……
何の因果か。
3年になって初めて同じクラスになったのだった。

きみを失った夏 体験版
(c)Aqua-baiser



さっきの中村との会話を思い出す。
付き合い始めた清水と小椋。
どんどんカップルになっていく同級生たち。
俺たちは男女交際なんてもう珍しくもない年頃なんだ。
女子とつるむのは恥ずかしいことだなんて言ってる時代は
とうに過ぎている。だったら、俺も――

最近になってようやく気付いた自分の本心。
俺は千穂が嫌いだから避けていたんじゃなくて――
大切だから……小さい頃から好きだったから、逆に
素直になれずにいたんだ。

そう。俺は今も昔もずっと、千穂に片想いしている。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser

このお話の続きは製品版でお楽しみください。

きみを失った夏　体験版
(c)Aqua-baiser